

令和元年6月10日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02099

研究課題名（和文）日本の伝統音楽の新しい潮流：1920～30年代の三曲における新様式と新楽器

研究課題名（英文）New trends seen in Japanese traditional music: emerging styles and instruments of in the 1920s and 1930s.

研究代表者

福田 千絵（Fukuda, Chie）

お茶の水女子大学・グローバルリーダーシップ研究所

・研究協力員

研究者番号：10345415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の伝統音楽の転換期といえる1920年代から30年代に焦点を当て、新様式・新楽器の発表機会であった演奏会の分析を通して、1935年を頂点とする新しい潮流の実状を明らかにすることを目的とした。

初めに、三曲（箏曲・地歌・尺八）の700点余りの演奏会プログラム及び約1万件の演奏会情報に基づき、演奏者、曲目、使用楽器を調査し、資料集を作成した。研究の前半では、朝鮮および樺太における新日本音楽の実態を調査した。後半では、三曲演奏会で使用された楽器について、三曲本来の楽器、改良された新楽器、他種目の既存の楽器、西洋楽器に分けて検討し、激変する時代に沿った楽器の工夫について考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、様式の変化、新楽器の使用に着目することによって、これまで特定の音楽家による試みとして語られる傾向にあった、この時代の全体的な流れを明らかにすることを試みた。その結果、新様式の音楽は各地で広く受け入れられ、多くの演奏家によって行われていたこと、楽器については新旧のさまざまな楽器を自由に用い、新しい響きを求めて工夫されていたことが、多くの具体的な事例から明らかになった。本研究によって、近代の邦楽には、新しい時代に沿うための多様な試みがあったことを指摘することができた。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the transformation seen in Japanese traditional music from the 1920s to 1930s. It concludes an analysis of concerts that presented new styles and new musical instruments. It also aims to reveal the musical changes and to point out that musical trends were most active around the year 1935.

To begin, I studied the performers, songs, and the usage of instruments, based on about 700 concert programs and information of about 10,000 sankyoku concerts, and compiled this information. In the first half of the study, the actual situation in Korea and Sakhalin on new Japanese music were revealed. In the second half, the usage of instruments in the sankyoku concerts was classified into sankyoku original instruments, improved new instruments, existing instruments of other genres, and Western instruments. Finally, the study establishes that the musicians tried various instruments to adjust to the radical changes seen at that time.

研究分野：音楽学

キーワード：三曲 新日本音楽 伝統音楽 様式 楽器 西洋楽器 樺太 朝鮮

1. 研究開始当初の背景

筆者は、これまで、近世の箏曲文献、および近現代の演奏伝承、近代の演奏の場の研究に携わってきた。とくに、博士論文以降は、近代の箏曲家米川琴翁(1883-1969)の音楽活動について、伝記的研究、作品研究など多面的に研究を行ってきた。前回の科研費の研究(H23~H26年度、課題番号23720075)では、近代の邦楽演奏の場について、邦楽雑誌『三曲』(1921-1944年刊行)をもとに、データベースを作成し、1万件に及ぶ演奏会データから邦楽の演奏会の変遷について論じた。

上述の研究を通して、1935年ごろを頂点とし、演奏会の開催数が増え、さまざまな新しい試みが行われたことが明らかになった。新しい試みには、子どものための童曲、日本舞踊や地唄舞を交えた演奏会、箏曲・尺八を用いた新しい種目、箏・三味線・尺八等の伝統楽器を改良した新楽器を用いた新しいレパートリーがみられた。また、映画・民謡・ジャズなどさまざまなジャンルで同じような傾向が生じていたことも、研究を通して見えてきた。1920年代は、明治以来の西洋音楽の影響を邦楽に取り入れた、いわゆる「新日本音楽」の時代であるが、この年代における日本の伝統音楽の動向は、これまで特定の音楽家による限られた試みとして記述され、一面的な見方が主流となっており、実際には多くの箏曲家が、新楽器開発を含め、じつに多種多様な試みを行っていたことはほとんど知られていない。しかしながら、筆者は、上述のように、実際には複数の音楽家による多種多様な試みがあったことを示す知見を得た。そこで、本研究では、1920年代から30年代にかけての邦楽演奏会について、雑誌『三曲』をさらに活用して分析を行い、多くの演奏家が多種多様な新様式・新楽器を打ち出した状況を詳細に明らかにすることを着想した。

2. 研究の目的

本研究は、日本の伝統音楽の転換期といえる1920年代から30年代に焦点を当て、新様式・新楽器の発表機会であった演奏会の分析を通して、洋楽を含めた異分野とのクロスオーバー、新楽器の使用、新様式に携わった音楽家、に着眼して考察を行い、1935年を頂点とする新しい潮流の実状を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

研究においては、邦楽の中でも先進的な活動がみられた三曲(箏曲・地歌・尺八)に着目し、三曲の雑誌に掲載された演奏会プログラムを整理し、演奏者、曲目、使用楽器を調査した。

まず、雑誌『三曲』掲載の演奏会プログラムを抜粋し、基礎資料集を作成した。資料集を用いて演奏会プログラムの情報を精査することにより、新音楽・新楽器の内容について、様式、曲目、楽器の特徴などを考察した。その作業と並行して、『三曲』本文および彙報欄の新様式・新楽器関連記事の抽出を行った。また、『三曲』以外の資料として、他の雑誌や新聞等も利用した。

考察にあたっては、これまでのように限られた作曲者に焦点をあてるのではなく、網羅的に演奏会プログラムの内容を分析し、全体像をとらえることに留意した。1910年頃から箏を始めとして、三味線、琵琶、尺八等の改良楽器が次々と試作された。その中には定着して現代まで用いられている楽器も少なくない。当時の演奏会プログラムには、新楽器の発表と、そのための新様式の楽曲が披露された会がみられるので、新楽器の使用と曲目に

について考察した。そして、さまざまな新しい試みは、宮城道雄以外にも、米川琴翁、大倉喜七郎等、複数の音楽家によって行われたことは知られているが、本研究では、演奏会の分析を通して実際に、どのような人々が新しい試みに関わっていたのかにも注目した。

4．研究成果

以上の手順により、1920年代から30年代にかけての日本の伝統音楽の新様式・新楽器の動向について三曲を中心とした実施状況について考察を行った。なお、筆者が研究分担者となっている科研費研究において、戦前の台湾についても研究を行い*、本研究の成果に反映させた。

初めに、三曲（箏曲・地歌・尺八）の700点余りの演奏会プログラム及び約1万件の演奏会情報に基づき、演奏者、曲目、使用楽器を調査し、資料集を作成した。研究の前半では、朝鮮および樺太における新日本音楽の実態を調査した。後半では、三曲演奏会で使用された楽器について、三曲本来の楽器、改良された新楽器、他種目の既存の楽器、西洋楽器に分けて検討し、激変する時代に沿った楽器の工夫について考察を行った。

その結果、まず、外地における新日本音楽の演奏状況の一端が明らかになった。各地で新しい様式の音楽が積極的に取り入れられていた他、従来の伝承曲も流派を超え、比較的自由に合奏が行われている様子が垣間見えた。内地に関しては、新楽器の使用は楽器の開発者を中心に行われるものの、その楽器の演奏者が多いほど、より多くの演奏機会を得て普及する流れも見ることができた。また、新楽器使用に関連し、洋楽器が代用楽器として役割を果たしていたこと、また、新しい音楽に洋楽器が取り入れられて新鮮な響きを生み出し、効果的に使用されていたことも明らかになった。総じて、1920年代から30年代にかけて、邦楽においては新楽器と新様式の音楽に関するさまざまな試みが行われ、それらが幅広い演奏機会を得て聴衆に受け入れられていたことが伺えた。

なお、最終年度に研究報告書を作成した**。

*平成27～29年度科学研究費補助金「日本伝統音楽の越境—植民地台湾における『邦楽』の伝承」(基盤研究(C)課題番号15K02112)研究代表者：劉麟玉、研究分担者：徳丸吉彦、小塩さとみ、福田千絵

**科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)平成27年度～平成30年度研究報告書「日本の伝統音楽の新しい潮流：1920～30年代の三曲における新様式と新楽器」研究代表者：福田千絵、2019年2月

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

1．2017年3月 寄稿論文「戦前の樺太における三曲の普及についての一考察：雑誌『三曲』を中心に」『お茶の水音楽論集』18号：113-122.

2．2016年4月 金志善；福田千絵(共著)「1920年代の朝鮮における新日本音楽の展開—都山流尺八の佐藤令山の活動を中心に—」『韓国音楽史学報』(韓国語)(査読有)

〔学会発表〕(計3件)

1. 2018年8月 Role of Western instruments in the modernization of Japanese traditional music. (International council for traditional music 国際伝統音楽学会、Study Group: Music of East Asia 東アジア音楽研究部会, Seoul: National Gugak Center, 2018年8月)

2. 2017年10月 「戦前の三曲演奏会で用いられた新楽器をめぐって」日本音楽学会第68回大会.

3. 2016年4月 金志善・福田千絵「1920年代の朝鮮における新日本音楽の展開—都山流尺八の佐藤令山の活動を中心に—」韓国・朝鮮文化研究会第56回研究例会.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。